

障がい児のきょうだいを支えるワーク ショップ ～つながろう、響き合おう～

社会福祉法人 名古屋キリスト教社会館 東部地域療育センター ぽけっと
〒464-0032 愛知県名古屋市千種区猫洞通1-15

助成事業の概要

障がい児を取り巻く環境の改善が進む中で、その家族や健常なきょうだい（以下、きょうだいと略）への支援の必要性が指摘されている。本実践では、きょうだいが保護者と一緒に参加できるワークショップを開催した。内容として、乳幼児のきょうだいも参加できるように、ルールが単純なドラムサークルを実施した。ドラムサークルはファミリーテーターを中心として即興的に作り上げる打楽器のアンサンブルであり、全員で輪になって一緒にドラムを叩くという非言語的なアプローチを通じて、他者との「つながり」や「コミュニケーション」を体感できるという効果があるとされている。ドラムを叩くという行為を通じて、きょうだいのストレス発散をはかるとともに、ワークショップ中は障がい児はスタッフが保育し、保護者には日頃ゆっくり関わる時間を持つことが難しいきょうだいとのコミュニケーションを深めてもらうことを目的とした。

ワークショップ終了後にはアンケートを実施し、達成できた内容を調査した。

時期は、2015年12月6日に実施した。

事業の成果

1. 参加状況

当センター通園部の在園児と卒園児の家族に周知したところ、10家族22名の申し込みがあり、当日2家族が欠席し、8家族17名（保護者8名、きょうだい9名）の参加があった。

きょうだいの年齢は1歳～10歳と幅があり、1歳1名、5歳2名、6歳2名、7歳2名、9歳1名、10歳1名であった。初対面のきょうだいが多い中、リラックスした楽しい雰囲気の中で自然発生的に自己紹介がはじまり、きょうだい間の交流や家族間の交流を深めることができた。

2. アンケート結果

1歳児のきょうだいを除く16名をアンケートの対象とした。参加した感想について、「とても楽しかった」という回答が保護者は8名中7名、きょうだいは8名全員から得られた。さらに16名全員が「機会があればまたドラムサークルに参加したいと思う」と回答し、ドラムサークルを用いた保育付きの親子参加型ワークショップがきょうだい、保護者双方の支援に有効であることが示唆された。「色んな太鼓がならせて良かった」という感想が複数あり、様々な打楽器に触れるのも初めての親子が多く、新鮮な体験になったことがわかった。

ワークショップの中で最も盛り上がったのは、きょうだいが順番にリーダーになってドラムのリズムを全員に指示するセッションであった。アンケートの自由記述の中でも「指示するのが楽しかった」と具体的に言及があった。現実の生活を離れて、保護者を独占した濃密な時間の中で、「主役となって注目を浴びる」機会や「自分がリーダーとなって場を進行する」体験は、きょうだいのストレス解消や、自己肯定感の回復や有能感につながったと考えられる。

3. センター内での実践の共有

スタッフはきょうだい支援の重要性を改めて実感でき、療育場面できょうだいにも障がい児と同様に頻回に声をかけることを大切にしている。実施結果をセンター職員全体にも報告し、きょうだいにとって今後もこのような機会の継続の必要性を確認できただけでなく、障がい児や発達に不安を持つ子どもたちに対しても（保護者等大人に対しても）、打楽器を用いた非言語的なアプローチの方法を療育やリハビリに取り入れていく事を積極的に検討し、検証を続けていくことを確認した。

■ 成果の広報・公表

一般に向けては、当法人ホームページ（shakaikan.com.group_tobu.html）に今回の実践を掲載する。ドラムサークルの講師のホームページにも（gifudc.blog33.fc2.com/）に今回の実践を掲載してもらい、音楽関係者への広報につとめた。

法人内においては、職員会議を通じて全体に報告され、法人内にある 3 か所の就学前の通園施設、2 か所の保育園にきょうだい支援の必要性や、支援のノウハウが共有された。

さらに、当センターが発行する新聞第 4 号に掲載し、当センター利用者のみでなく、名古屋市東部（千種区、守山区、名東区）の福祉施設、医療機関、保育園、幼稚園等の 200 か所に配布する他、地元の東山学区の家庭に 4 000 部配布する予定（全部で 5000 部発行予定）である。

■ 今後の展開

今後は、通園児以外の、診療所の外来に通ってきているきょうだいにも支援を広げていく予定である。なお、今回は胃瘻や気管切開がある重症心身

障がい児を持つ 2 家族が、障がい児本人の入院や体調不良で欠席だった。参加希望は強いが、保護者が通院・看護のため会場まできょうだいを送迎できないという理由で不参加となった。今後は医療依存度の高い障がい児を持つ家族が参加しやすいように、家族のニーズを丁寧にくみ取り、会場へのアクセス方法を含めてワークショップを企画していく必要がある。開催時期についても、比較的障がい児の体調の安定している気候の良い時期に年間スケジュールを組んでワークショップを企画していく。

きょうだいのみでなくセンター利用者自身に対しても、ドラムサークルのワークショップの機会を増やして、支援方法や非言語的なアプローチとして有効か、より詳細な分析を行う。